展勝地風土記 Vol.11
平成27年1月23日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。本年度4回目は、「この地に惹かれて」と題して、展勝地に深く携わった和賀篤子氏の作品を紹介します。
次回は平成27年4月24日に発行します。

『この地に惹かれて』

和賀篤子

地形の妙

展勝地一帯、もちろんその頂点は国見山であるが、このエリアはいわゆる〝気〟の集まる所なのではないだろうか。その〝気〟に惹かれて昔から多くの人々がここに集まり、いろいろな生活を営んできた。

以前の小学校社会の教科書には「『東北最大の河川北上川が、最も北上山地に寄って流れている所』として黒沢尻の名があった」と郡司直衛さんがかつて記しておられる。その黒沢尻を目指して奥羽山脈の和賀岳、別名阿弥陀仏岳とも呼ばれる峻岳を源流とし、和賀川がその平野を潤しながらこの地点で合流し、見事な景観を繰り広げている。まさしく天然の成せる技であろう。

その西山を遥か望んで樺山遺跡があり、縄文時代「明日もどうか太陽が昇ってくれますように、野原に多くの食物が満ち溢れますように」と沈む太陽に祈りを捧げたであろう丘が今に残る。

時は語る

時を経て古代、律令支配のもと国見山文化が花開く。その中心となった極楽寺。中央政府からも定額寺として認められるこの寺院は、「平泉文化」に先駆けるものとしてその存在が評価されている。発掘学術調査された数棟の貴重な寺院跡とともに周辺にあった薬草園。この地の風土では自生しにくいとされる植物はどのようにして移入されたものなのか。多くの民の医療に携わったであろうこれら植物の存在は、当時の繋栄を物語る。

時代が下がって「前九年の役」。八幡太郎義家がその時に構えたとされる陣ヶ丘はその名にふさわしく広い眺望からくる格好な軍略の場であることが、今も痛感させられる所である。対する川を隔てた阿部舘は平時の居城として地域民の拠点であったろう。周辺にも古城場や孫(馬子)屋敷などの地名が往時をしのばせ、古来多くの人がこの地に集散してきたことは史実が物語る。

そして藩政時代から蒸気機関車が初めて黒沢尻を通る明治前半までの舟運である。江戸・大阪などからの中央文化を直接運ぶひらた舟。しかしその大型舟を運んだ北上川は、ここ黒沢尻から上流は川底が浅くなることからこの港で小型船に積み替えられ、さらに盛岡藩城下へと上る。またここから陸路、東西に運ばれる荷物も多くあったという。この地は陸路の要所でもあった。明治29年、三陸の大津波によって断念せざるを得なかった「まぼろしの陸羽鉄道」と呼ばれた秋田港と釜石港を結ぶ遠大な構想の拠点は、この東西陸路の中心であった黒沢尻に置かれている。両県沿線の各首長、関係議員の協賛と署名を得、当時の陸運省の許可も得られて着工の寸前であったことが証明されている。もしこの構想が実現していれば…の思いはもちろんであるがいずれにしろ地理的に東西南北の陸路の要所であることが立証されることである。これらの陸路は黒沢尻川岸の荷揚げ、荷下ろしの業務に関わるところが大きい。もしここに港がなければこの地域の発展はもっと違ったものになっただろう。黒沢尻が舟運によって大いに栄え、後に多彩な人物を輩出したことを思えば、この港の存在は大きい。

澤幸翁[※2]もおのずとこの地に惹かれ、多くの人たちの支えもあって桜の大イベントに挑んだと思わざるを得ない。

アジサイに込めて

もう30年以上前になるが、展勝地の河川敷に「アジサイ」を植えようと計画したことがあった。並木の桜が散ってツツジも終わり、白鳥がくるまでの間、水辺に合う花を植えよう

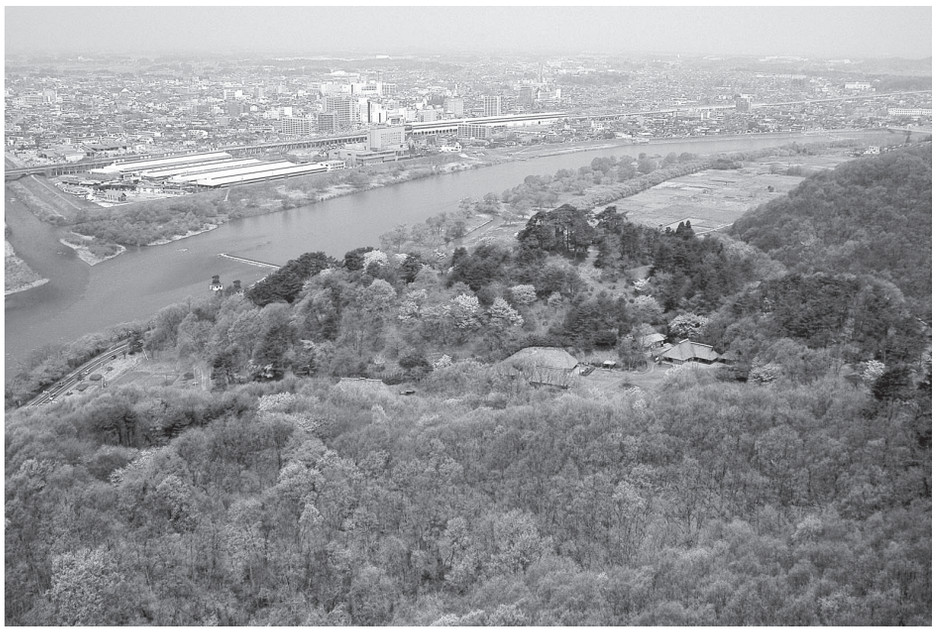
※1　郡司直衛　みちのく民俗村名誉村民。北上山岳会創立会員。(社)東北地域環境計画研究会会員。郷土に関する著書多数。
※2　澤幸翁(澤藤幸治)　展勝地育ての親。大正9年和賀展勝会を結成し、翌年展勝地を開園させた。昭和9年から黒沢尻町長を2期、12年から終戦まで県議会議員を務める。35年没。43年に市民の手でみちのく民俗村入口に銅像が建てられた。

と話し合い、それについては行政になるべく頼らず、自分たちの力でやってみよう、ということであった。そこで各自の庭にあるアジサイの枝を持ち寄ることとし、もし趣旨に賛同してもアジサイを植えていない人はコーヒー一杯分の300円を1口として協力してください、とした。このことになんと1200人もの人が賛同してくださり、植え付けの作業にも多くの人が長靴姿で駆け付けてくださった、ということがあった。しかしその後は会員の高齢化が進み作業も不慣れなことが多くせっかくのアジサイ畑を荒らしてしまった、という経緯があるが、昨今この手入れに手伝ってくださるボランティアのグループが出てきているので、今後のことは相談の上、方向づけられていくことになると思う。近年この場所に水仙を植えるグループがでてきて、地元の中学校の生徒さんも協力してくれるので将来性に期待が持てる。

みちのく民俗村

そして今、民俗村の存在に注目が集まっている。かつて東北では珍しいといわれた「野外博物館」。歴代のユニークな村長さんのもと、支えたスタッフによって本当にいろいろなことを学んだ。多くの感動もいただいた。市民のほとんどは何らかの形で足を運び、県内外からどれだけの人がここを訪れたことか。

いずれにしろ、あの展勝地エリアは不思議な偶然性も含んで人を惹きつけるものがある、という感は否めないのである。私たちはこの大自然からの〝気〟をうけて謙虚にこのエリアを守っていかなければならないのではないだろうか。



野外博物館として整備されたみちのく民俗村

民俗村には北上川流域とその周辺の古い民家が移築復元された。写真は旧星川家住宅

筆者プロフィル

和賀（わが）　篤子（あつこ）

1932年(昭和7)黒沢尻町(現・北上市)生まれ。宮城学院女子短大卒。北上市立図書館に女性初の司書として勤務。退職後市内書店勤務を経て、北上市立図書館近世文書調査員を務める。元北上さくらの会副会長、元北上あじさいの会副会長、旧展勝地整備懇談会委員、元北上市立博物館協議会委員。現在、北上市みどりのまちづくり審議会委員、北上史談会会長